

②1 A 国 語

(注意) 答えはすべて解答用紙に書きなさい。

一、次の1～8の——線をつけたカタカナを漢字で、漢字の読みをひらがなで書きなさい。

- 1 ゲンセンされた素材で料理を作る。
- 2 失言で批判のヒョウテキとなる。
- 3 この車はネンピが良いことで有名だ。
- 4 昼食後に飲んだ薬がキいてきたようだ。
- 5 給湯室にお茶の用意をしておきます。
- 6 最近、新しい勢力が台頭している。
- 7 潮時をみて引き上げよう。
- 8 雑木林には、たくさんの生き物が住んでいる。

二、次の1～4のことわざともっとも近い意味のことわざをA群から探し、その□にあてはまることばをB群からそれぞれ一つずつ選び、記号で書きなさい。ただし、同じ記号は一度しか使えません。

- 1 後は野となれ山となれ
- 2 かえるの子はかえる
- 3 えびで鯛をつる
- 4 紺屋の白袴

A群 □にかすがい
待てば□の日和あり
□の道も一歩から
濡れ手に□

□の背比べ
□にくぎ
棚から□
渡る世間に□はなし

まかぬ□は生えぬ
□の恥はかき捨て
転ばぬ先の□
うりのつるに□はならぬ

人を見たら□と思え
□の不養生
□の上にも三年
悪事□を走る

B群	ア 杖 つえ	イ 種	ウ なすび	エ どんぐり	オ ぬか	カ うり	キ 医者	ク 坊主 ほうず
	ケ 栗 あわ	コ 鬼 おに	サ とうふ	シ 海路	ス 船頭	セ さば	ソ 千里	タ 旅

三、次の詩を読み、後の問いに答えなさい。

娘に

征矢 泰子

- ① ここからみると
- ② おまえはひとくきのはなのようだ
そだつことにひとかけらのうたがいもなく
ときどきはこつそり せのびさえしたくせに
いまさら
ふくらみはじめたわれとわがはなびらに
とまどつてじれている
- ③ ひとくきのはなのようだ
いつしか④ うしろふりむくことをしつて

もういちど すべてののはじまるあのひとつぶのたねに
もどつてみたくていらだっている
おまえはここからみると
あめのなかでゆれている
とほうにくれたういういしい
ひとくきのはなのようだ
さくことへのふくらみの⑤ うつくしさか
まるでさんこなばつのようにさえみえるほど
まあたらしいひとくきの
はなのようだ

1 —線①「ここからみると」とありますが、どのようなところからみていますか。答えとなる次の文の□にあてはまる漢字一字を考えて書きなさい。

□の視点からみている

2 —線②「おまえはひとくきのはなのようだ」とありますが、これはどのようなことをたとえていますか。次の中からふさわしいものを一つ選び、記号で書きなさい。

ア 花が開くように今まさに成熟に向かっている様子
ウ ゆつくりと成長し、人知れず大人になっていた様子
オ 誰にも頼らず、自分ひとりの力で孤独にたえている様子

イ 美しく気品にあふれてまわりに笑顔えがほをふりまく様子
エ 周囲にその美しさを賞賛され、祝福されている様子

ちは急いでいたけれど、重い弟を背に負つての山の下り坂は、一步一步踏みしめなければ、とても進めないのだった。

——ああ、十五分、十五分。まにあわない——

十五分は、とつくに過ぎていたと思うけれど、ふもとの橋のたもとで、利美のお父さんは、待っていてくれた。荷車は、山のような家財道具であった。荷物を疎開させてあつた人が、終戦と同時に、それを、再び高知にとりよせるところだったのだらう。八月十五日を、いく日かすぎた頃だったように思う。

「えらい熱じゃのう」

利美のお父さんは荷物を片よせて、弟が横になれる日かげの場所を作ってくれと、すぐ出発した。ざわざわと風に鳴る木と崖の林のその合間をぬけ、右に溪流の音をききながら、私にとっては、^④それはそれは長い時間だった。

八キロメートルほど行つたところに、小さな診療所があつた。

「どうする？ この先生にみてもらうか？」

そういわれて、私は弟を抱き、ほとんど馬車を降りそうになつたものの、^⑤踏みとどまつた。

「ううん、おらない、高知の病院へいきたい」

意識も^③うつつのこの熱、とてもこの小さな診療所では、おぼつかない気がしたのだった。

「そうか、そうするか」

彼は再び、高知にむかつて急いでくれた。高知の町は、ただただ焼け野原で、^⑥旭から、はりまや橋がみわたせるという、瓦礫と灰の町であつた。

「わりいのがのう、わしはここで荷をおろさにやららん、二時間ばあかかろが、待つなら、その先までつれていくが、どうする？」

二時間ときいて、私は降りて歩く決心をした。父か母がいるだろう家は、永国寺町である。ここ旭からいっしょうけんめい歩いて、なんとか一時間以内でいつてみよう、礼をいうと、私は、走るようにして歩きに歩いた。かっと思ひつける、夏の太陽を受けながら、背には、重い熱い弟を負つて、顔じゅう、雨のように汗をしたたらせながら、私は歩いた。

「ねえ、ぼく、大丈夫？」

「うん」

「もうじきやよ」

「うう」

「うう」でも「うん」でも、返事のあるうちはまだ良かった。そのうち、なんと話しかけようと、ゆするうと、弟からは、なんの応答もなくなつてしまった。

——ああ、この子は死ぬ、暑さに当てられ、熱が脳に入つて……ああ、死ぬんだ死ぬんだ。私はなんとバカなことを。あそこ診療所で、おろせば良かった。私が、こんなバカなことをしてつれだしたから、もうすぐ、もうすぐ死ぬのだ……——

私は、ものをいわなくなつた弟を、ずりあげずりあげ、泣きながら歩いた。とにかく息のあるうちに、父か母に渡したい。息のあるうちに。ほこりと汗と涙で、ぐしょぐしょになり、倒れこむようにたどりついた、永国寺町の家には、たのみとする父も母もいなかった。

私の声をきいて、階段をかけおりてきたのは父の末弟、若い内科医の叔父であつた。

「叔父ちゃん」

^⑥あとは、言葉にならなかつた。叔父は、弟をだきとり、

「これはいかん」

叫ぶなり、シートに弟を包み、自転車のかごにのせ、

「中央病院に行くからね」

と言つて、走りだしていった。私は、長い間、玄関の板間に横たわつていた。

——今、弟は息をひきとっているにちがいない——とめどもなく、涙は流れて床をぬらした。

あまりの疲労のために、私は、うとうとしたらしかった。気がつくと父が目の前にいた。

「お父さん」

私は、またも、泣きだしていた。——ごめんなさい、私が死なせてしまったの——

こういうつもりなのに、口は、思うように動かなかつた。

「ありがとうよ、雅子」

父は、^⑦ぼうしを取つて、私にむかつておじぎをした。ぽかんとする私に、さらに、

「お前の知恵と勇気と判断が、あの子を救つた。お前の勇気のおかげで、あの子は助かつたよ。ありがとう、ありがとう。よ

くやつてくれた」

——助かったのだ、死ななかった——

ようやく、父のいう意味がのみこめたとき、目の前が、ぼうつとかすんでしまった。今度のは、うれし涙だった。弟は敗血症と診断されたが、あぶないところで、命をとりとめることができた。すべては、神のみ守りであつた、と思うけれど、私にむかつて、ぼうしを取った父の姿は、今もなお、私の胸の中に残っている。

(森本雅子『ぼうしを取って』けやき書房による)

注1 疎開 〓 空襲に備え、田舎に引越すこと

注2 森村 〓 地名。現在の高知県土佐郡土佐町一部の古い呼び名

注3 うつつ 〓 ここでは、「夢が現実かはつきりしない状態」の意味

注4 旭から、はりまや橋がみわたせる 〓 「旭」も「はりまや橋」も高知市内の中心地の名前。高知城をはさんで、二キロ以上離れている。

注5 敗血症 〓 細菌が傷から血管やリンパ管に入りこんで起こる病気。重い場合は死亡する可能性がある。

1 線①「不安がよぎった」とありますが、どのような「不安」ですか。次の中からふさわしいものを一つ選び、記号で書きなさい。

ア お父さんやお母さんはこのまま家に帰って来ないのではないかという不安

イ 弟は重い病気で、このままだと命を落とす危険があるのではないかという不安

ウ 自分が弟を背負って高知の病院まで行かなければならないのではないかという不安

エ 弟はもしかしたら敗血症にかかり、高熱を出しているのではないかという不安

オ 弟が死んでしまったら、一緒にいた自分の責任が問われるのではないかという不安

2 ②A、②Bにあてはまることばを、Aは三字、Bは四字で、それぞれ文章中から探し、書きぬきなさい。

3 線③「利美のお父さん」について、どのような人物として読むことができますか。次の中からふさわしいものを一つ選び、記号で書きなさい。

ア 娘の友達への頼みを何でも快く引き受けてくれる親切な人物

イ 無理だと分かっていることを要求してくる非情な人物

ウ 無愛想な中にも気遣いや心の温かみがある人物

エ 仕事中心で、そのほかのことには目もくれない一本気な人物

オ すべてを投げうって、あかの他人を助けてくれる心優しい人物

4 線④「それはそれは長い時間だった」とありますが、なぜ「長い時間」であつたのですか。次の中からふさわしいものを一つ選び、記号で書きなさい。

ア 「わたし」の疎開先は高知からとても離れたところにあり、馬車では時間がかかつたから

イ 家財道具の上に、弟や「わたし」を乗せたことで、馬車がいつそう重くなり、速度が落ちたから

ウ 高知に行くまでのいなか道は、崖や林ばかりの続く単調な風景の連続であつたから

エ これまで自分一人で長時間にわたって弟を見ていたことがなく、両親に早く弟を渡したかつたから

オ 「わたし」は早く弟を医者にみせなければ、死んでしまうのではないかと気が気でなかつたから

5 線⑤「踏みとどまつた」とありますが、それはなぜですか。次の中からふさわしいものを一つ選び、記号で書きなさい。

ア 診療所には医者がいるかどうか分からなかつたから

イ 父や母に死にそうな弟を会わせるのが先決だから

ウ ここに一人で置いて行かれるのは不安だから

エ 高知の町まで行くと最初に決めていたから

オ 診療所では弟を救えない可能性があつたから

6 線⑥「あとは、言葉にならなかつた」とありますが、どのようなことを言葉にしたかつたのですか。次の中からふさわしいものを一つ選び、記号で書きなさい。

ア 弟が高熱を出しているので連れてきた

イ お父さんとお母さんに知らせしてほしい

ウ 山頂からここまで弟と二人で来た

エ 弟を病院に連れて行ってほしい

オ 弟は今にも死にそうである

7 線⑦「ぼうしを取って、私にむかつておじぎをした」とありますが、ここから父のどのような気持ちが読みとれますか。次の中からふさわしいものを一つ選び、記号で書きなさい。

ア 自分になりかわって弟を守りぬいた「わたし」を敬い、感謝する気持ち

イ 暑い中で、汗まみれになりながらがんばった「わたし」をほめる気持ち

ウ 最後まであきらめなかつた娘の「わたし」を自分の子として誇りたい気持ち

エ 知らぬ間に「わたし」に大変な苦勞をさせてしまったことを申し訳なく思う気持ち

オ 弟の無事を「わたし」と共に喜び、神のみ守りに感謝の思いを抱く気持ち

五、次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

おはじきのように、ばらばらになつていて、一、二、三と「数える」ことができるものは、「多い・少ない」と言うことを述べたが、実は、「数える」とことと「多い・少ない」と言えることとは、ぴったり対応しているわけではない。「数える」ことができなくとも、「多い・少ない」と言える場合があるからである。

ここで「はかる」の問題を取り上げなければならない。

大雑把な言い方だが、「数える」と「はかる」を比較すると、「数える」方が①である。(注1)対象物の個体という性質を使つて、個体ごとに順に一、二、三と数字を振つていけばよい。対象物が大きいかわ小さいかは無視する。全体を数え終えた時、その最後の数字が全体の数ということになる。

ところが、一個体の内部の量(たとえば「一メートル」)を問題とする時には、このように数えることができない。個体の内部の量とは、その個体の性質だからである。性質に対して数字を振ろうとしても、手掛かりがない。そこで、よそから道具を借りてくることになる。このように道具を借りて、一、二と目盛りを読むことを「はかる」と言う。ただし、よそから借りた単位であるため、ぴったり一メートルとはいかず、一メートル八センチのように端数が出ることもある。数えた時は端数が出ることはない。この点が大きな違いである。

そして、このように個体の内部の量をはかった時は、「長い」とか「大きい」とか言うのであって、「多い」と言うことはできない。

数えることができない場合は「内部の性質」のケース以外にもある。それは、物が粉のように細かすぎる場合で、一、二と取り上げて数えることができない。そこで、容器を借りてきて、その中に粉を入れて、容器いくつ分あったか「はかる」。しかし、こうしてはかった時は、「はかった」のに、不思議なことに、②。

例を見よう。

柿の実^{かき}は塊^{かたまり}だから一、二、三と数え、「多い・少ない」と言う。柿の種^{ずいがん}となると随分小さいが、やはり一、二、三と数えて、「多い・少ない」と言う。ブドウは房^{ぶどう}の塊と実の粒^{つぶ}があるが、房も実も種も一、二、三と数えて、「多い・少ない」と言う。小豆^{あずき}の粒も、米の粒も、一、二、三と数えることができ、「多い・少ない」と言う。ここまでは問題がない。

しかし、砂糖となると、角砂糖であればその塊を数えられるが、粉の砂糖は粒を数えることはできず、スプーンや容器で「はかる」。水は、もはや数えることはできず、できるのははかることだけである。そして、はかった時も、「多い・少ない」と言う。^③このことが問題である。それだけではない。実は、ブドウの実や小豆や米の粒も、普通は数えずに、はかりや升^{ます}で重さや容量をはかる。この時も「多い・少ない」と言う。

数えた時だけではなく、はかった時も「多い・少ない」と言うのはなぜだろうか。砂糖や水のように集めたり運んだりできるものは、物として扱^{あつか}つて、はかりや升で重さや容量をはかることができる。そして、その量は、砂糖や水の性質(個体の内部の量)というわけではない。集まった量、存在の量だから(分離量^{ぶんりりょう})だから、数えた時と同じく、「多い・少ない」と言えるということだろう。

これは、^④霧^{きり}や靄^{もや}のことを考えてみるとわかる。

霧や靄は一、二、三と数えられない点、水と似ているが、しかし、水と違い、集めたり運んだりすることができない。そもそも物としての手触^{てざわ}りがなく、存在感^{존재感}が乏^{はげ}しい。このような時は、集まった量、存在の量として「多い、少ない」と言うことはできない。

ここで、どういう場合に「多い・少ない」を使うのかを、整頓^{せいとん}しよう。

「多い・少ない」と言えるのは、対象物が個体(塊)であつて、内部の量を「はかる」のではなく集まった量(存在の量)を「数えた」時、また、対象物が粉や液体であつて、その集まった量(存在の量)を「はかった」時、ということになる。つまり、塊であつても粉であつても液体であつても、内部量でなく、集まった量(存在量)であることが条件なのである。

最後に、個体でも、数えないことがあることを補足しておこう。これは、言葉の働きを知る上で大事なことである。昔、畑で採れたスモモの出荷^{しゅつか}を手伝ったことがあつた。普通、スモモは一、二、三と個数を数えて丁寧に箱に詰める。しかし、大ききや形や色が規格外のものは数えずに、箱に詰めてから重さをはかった。どちらも出荷できるのだが、^⑤「ガイ」(規格外)と呼ばれるスモモは個体として数えることはしないで、粉や水のようにはかつて重さだけを表示した。「数える」かどうかは、単に塊か粒か粉か液体かという形状だけでなく、人間が「数えるに値する」と考えるかどうかにもよるのである。

(久島茂『はかり方の日本語』筑摩書房による)

- 1 ① にあてはまることばとしてふさわしいものを、次の中から一つ選び、記号で書きなさい。
 ア 正確 イ 高度 ウ 複雑 エ 低次元 オ 簡単
- 2 ② にあてはまることばとしてふさわしいものを、次の中から一つ選び、記号で書きなさい。
 ア 「数える」と言うことはできない
 イ 「数える」と言うことができる
 ウ 「長い・大きい」と言うことができる
 エ 「多い・少ない」と言うことができる
 オ 「多い・少ない」と言うことはできない
- 3 ③ 「このことが問題である」とありますが、なぜ問題なのでしょう。次の中からふさわしいものを一つ選び、記号で書きなさい。
 ア はかることができないものなのに「多い」と言うのはおかしいから
 イ せっかくリットルなどの単位があるのに使わないのはもったいないから
 ウ 数えることができないものなのに、「多い・少ない」と言うから
 エ 「多い・少ない」という観点では、物事の本質を表せないから
 オ 「多い・少ない」は、分離量を表すのに的確な表現とは言えないから
- 4 ④ 「霧や露」が「多い・少ない」と言えない理由は何ですか。次の中からふさわしくないものを一つ選び、記号で書きなさい。
 ア 一・二・三と数えられないから
 イ 運ぶことができないから
 ウ 物としての手触りがいいから
 エ 集まった量を確認できないから
 オ 存在量をはかることができないから
- 5 ⑤ 「『ガイ』（規格外）」と呼ばれるスモモは個体として数えることはしない」とありますが、それはなぜですか。次の中からふさわしいものを一つ選び、記号で書きなさい。
 ア 「ガイ」と呼ばれるスモモは、色や形が悪いだけで、味は問題ないから
 イ 「ガイ」と呼ばれるスモモは、一つ一つ数えるほど価値がないから
 ウ 「ガイ」と呼ばれるスモモは、売ることができないので数えるだけむだだから
 エ 「ガイ」と呼ばれるスモモは、存在量で数えるという習慣があるから
 オ 「ガイ」と呼ばれるスモモは、粉や液体の形状をしていないから
- 6 次の文の中からこの文章の内容と合っているものをすべて選び、記号で書きなさい。
 ア 「数える」ことができないものは、「多い・少ない」と言うことができない。
 イ 人間は個体の内部の量を知りたいときに、道具や容器を使用する。
 ウ 今ある単位はみな不完全な基準であるため、端数が出てしまうことがある。
 エ 数えられないものに対しては、必ず「多い・少ない」という表現を使う。
 オ 同じものであっても、場合によって数えるときと数えないときがある。